

計画案の夢

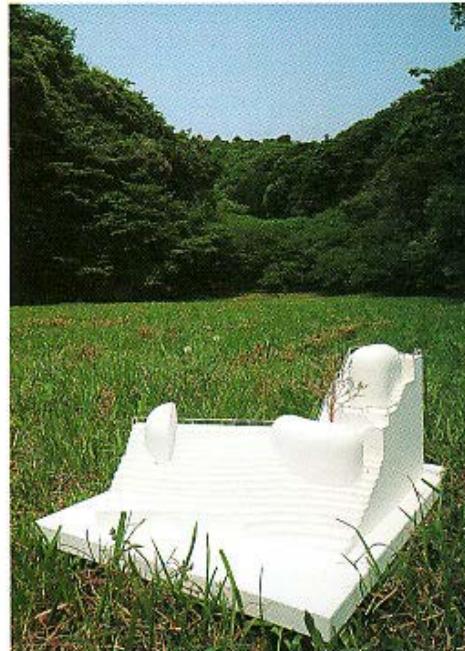
アンビルド・プロジェクト

アトリエCOSMOS
'93~'95

①

北鎌倉・明月谷アトリエ計画

文=白鳥健二
写真=大橋章夫

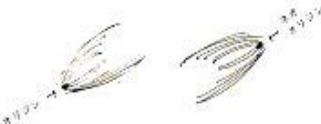


▲北鎌倉・明月谷アトリエ模型

二つのものの存在

「意識」と「無意識」の追いかけっこ

先頃、「住宅建築」1993年8月号において、(アトリエCOSMOSの仕事)と題して、1990年~93年の住宅作品を中心に発表する機会を得た。その前は確か1990年で、やはり本誌において(アトリエCOSMOSの近作)と題し、ア軒の住宅作品を発表した。そもそも、スタートは1980年。本誌12月号に初めて小住宅を発表して以来、延々と小作品を割り結けてきた。

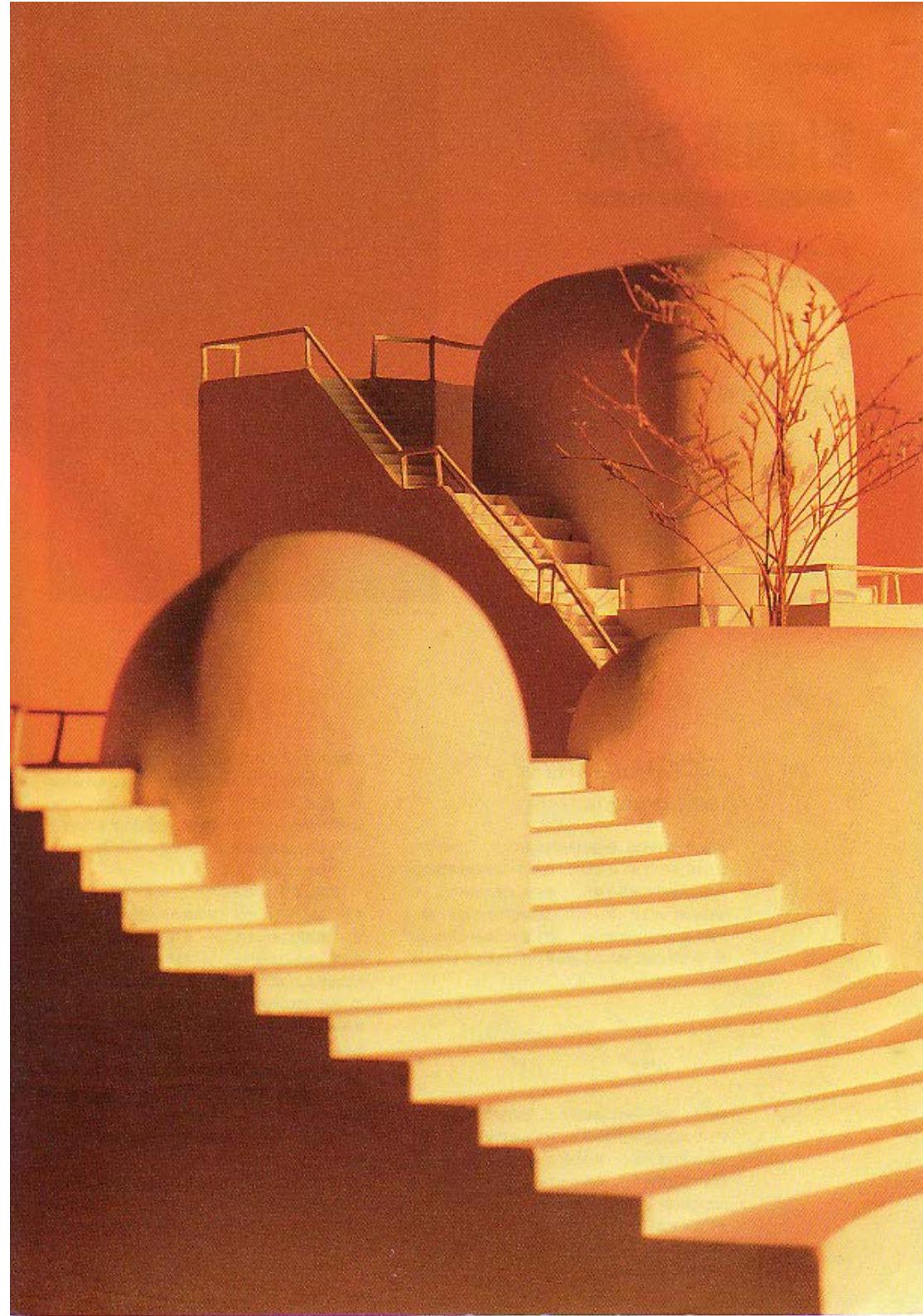


1993年、本誌8月号に掲載された、建築家黒沢隆氏によるアトリエCOSMOSの作品に対する評論文を、久し振りに読み返してみた。あらためて、氏の論文の幅の広さに感銘するところだが、それはともかく、この文章を読んで未だに私の中でくすぶっているものがある。私自身、今まで全く意識したことになかった点についての思わず指摘があったからだ。氏の評論文を初めて目にした時、表題

に譲われている「ポストモダン」という大きな文字であった。私は今まで、ポストモダンのムーブメントとは無縁の人間と思っていたし、「ポストモダン」を意識したこと一度もなかった。予め「様式」を意識してもののデザインをするほど高等な遊び感覚は私にはないと思っていたし、今でもそう思っている。

意識して行う行為そのものが、本来デザインであるならば、一体、今まで私の創ってきたものはなんだろう。意識的に創ったものか、それとも無意識のうちに出来上がったものか判然としないではないか。無意識のうちに出来上がったものを、後になって意識することによって、私の内面でそれが様式化していく、つまり、深層と表層から精神活動があるように、ポストモダニズムとは、自らの内にある深層を意識して、白日の下に晒すとともに、それと対立し、相反する表現を試みてそれを楽しむとする黒沢氏の論点が、私のモヤモヤした気持と確かにどこかで関係しているのである。今まで無意識のうちに出来上がっていたデザインを、この時ははじめて意識させられたかも知れない。

無意識のうちに行っていた私の設計の中味がある。あるきっかけで意識の世界に舞い降りてくる。その時、「無意識」は終る。と同時に新たに「無意識」がはじまる。意識と無意識は私の中で常に追いかけっこしている。



しらとり・けんじ／建築家

私自身、1993年頃を境に大きな段落を迎えることを余儀なくされたと述べた。数年かけて縦密に構築していた大きな計画がこの頃、相次いで挫折した。がその反面、挫折したから得るものもあった。このような出来事は、むしろ私にとっても良かったのかも知れない。

無意識の世界が、何者かによって白日の下に晒され、意識の世界に引き摺り下ろされる。そして今までとは違う無意識の世界が到来する。その中でものが誕生していく。クライアントに見放され、資本主義の経済原理に見放され、ほとんど死に悲となった計画に新しい息吹きを吹き込む。宙に浮いたまま、永久に塵埃出來ぬまま彼方に遠のいていく数多くの計画をもう一度しっかりと自分の元に引きもどし、その者達に本末のリアリティーを取り戻してあける慈好の機会が得られたのだ。

マクロバイオティックの創始者として知られる桜沢如一氏(1893-1965)は著書「東洋医学の哲学」において、「体が病弱だから人は丈夫になりたいと思う。短所が長所を呼ぶ」という。また「この世の極ての事象は、「陰」と「陽」という二つの大きなカテゴリーに納まる。「陰」の極端は「暗」であり、逆に「陽」の極端には「陰」が存在する」と、最大の短所は最大の長所を呼ぶ糸口になるというわけだ。クライアントの姿を失い、世間から冷ややかに扱われ、永遠の彼方に去っていくこれ等計画案の完結的に辿り着く先は、自分の足元なのであるか。

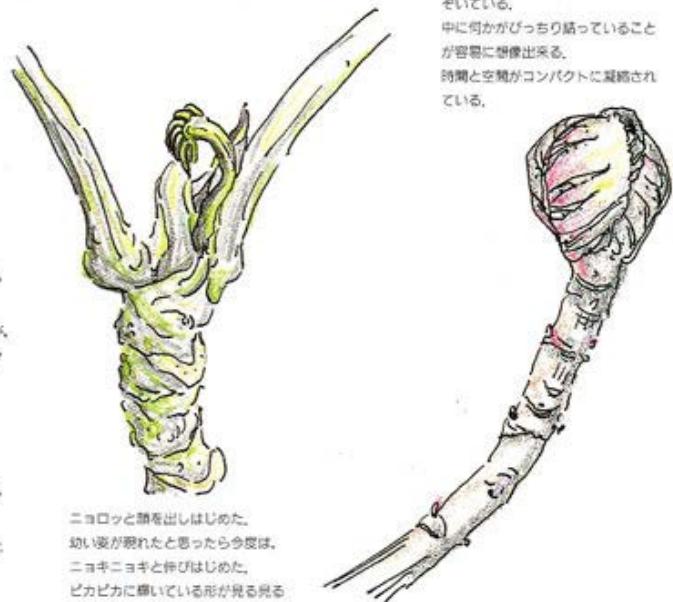
無意識の彼方にあるものは一体何が……?。無意識を根本的に成立させているものの存在は……?

表層としての様式……つまり意識の世界で固定化された形式と、深層に存在する無意識の世界における未知なるもの、この二つの存在が、いつもこの世で一つのものを形成しているのである。意識の世界があるから、無意識の世界がある。そう、無意識を存在させているのは意識そのものなのである。

深層にある自らの無意識性を、自分の足元から探し上げ、目の当たりでそれを意識する。物を創る私のエネルギーは、この二つのものの関係性から生れてくることだけは間違いないさそうだ。

北鎌倉・明月谷アトリエ計画

——なぜ円いのか——



はちきれそうな膨らみから何かがのぞいている。
中に何かがびっしり結っていることが
簡単に想像出来る。
時間と空間がコンパクトに凝縮され
ている。

“今、足元から上がってくるこの臭い。
私の足元からムンムンと湧き上がってくる
この土の臭い。
昨夜の雨の為か。私の座っているこの土が
膨れ上がっている。谷戸の斜面の土がフ
カフカと膨れ上がっている。
この太陽熱で、まるでパンのように、
とてもいい具合に膨らんでいる。

私の座っている辺り全体から上がってくる
この臭い。
まるで炎のように湧き上がってくるこの土
の臭い。
目に見えないこの炎の渦の中に
私は自分の身を置いている。
私は今、目に見えない幸せの渦の中に座っ
ている。
私は今幸せの絶頂に、ほんのひととき脚掛
けている。

——明月谷にて(私のスケッチノートより)——

21世紀は生命の時代と言われている。生命が最も重要なテーマとなることを指揮する人は多い。生命科学者の中村性子さんもその一人だ。

“古代から中世にかけては、神が生徒であった。近代から現代に至っては、理性とか科学が……、そして21世紀は生命がスーパーコンセプトになるだろう……”と予言している。

“生命とは、理性を包み込んだ、もっと大きな概念だ。生きるということは矛盾の内包であり、その矛盾を絶対内包したもののが生命という概念であり、これから的基本理念”と言う。

生活する為の器、生命を保持する為の器である居住空間は、内包空間でありたい。生命を包み込む、膨らみのある空間でありたい。

私は常々、こう考えている。

幼い形、

未発達な形、

生命感のある形、

ものの始まりを示唆する、

時間、空間が凝縮された、

そういう形でありたい。形態の原点はこういう原初的膨らみの中にある。私はそう確信し

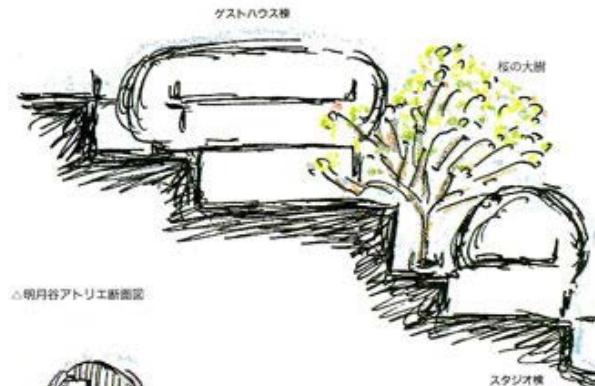


▲北鎌倉・明月谷アトリエ模型

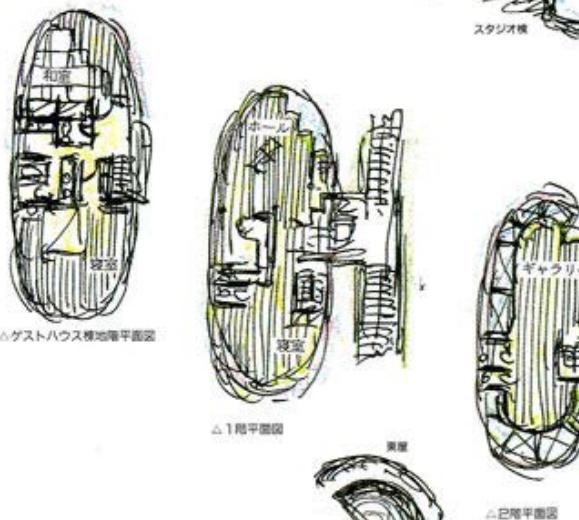
内包している。
かすかな墨りを内包している。
地中から湧き上がってくるわずかな深度を内包している。
いのちがゆっくりと膨らんでいく。



心が小さな口を開けている。
心の入口の奥に空間が広がっている。
奥へ行く程大きな空間になっていく。
意識と無意識を繰り返しながら空間
は大きく膨らんでいく。
大きくなって、やがて意識も無意識
もない大世界へと統合されていく。



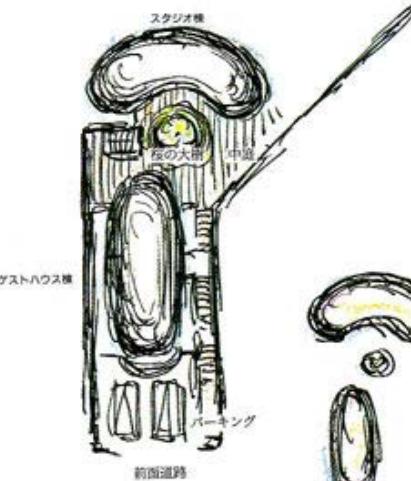
△明月谷アトリエ断面図



△ゲストハウス棟地階平面図

△1階平面図

△2階平面図



△全体配置図

[資料]	資料名	北鎌倉・明月谷アトリエ
設計	アトリエCDSCS	
所在地	丹波・明月谷山口ノ木原町	
構造	木造延床面積 1,000m ²	
施設構成	ゲストハウス棟 100m ² スタジオ棟 100m ²	
期間	起算	

ている。

北鎌倉・明月谷アトリエは、私達の現在のアトリエ(鎌倉市山比賀)の進化した次の時代に向けての発展系として、「あじきい寺」で有名な明月院の奥まった谷戸のなだらかな斜面に建つ予定で計画された。自然林で被われた場所だけでは、極く小規模な農業を営む事も可能だ。建築スタジオとギャラリーを併設した、「誠」と「美」が合体したミクロコスモスを想定したものだ。

私の住宅作品の最も初期のものに「ビアノハウス」(山田洋次郎)、「建築文化」1978年、「住宅建築」1979年)という家がある。屋根と壁が一体の曲面で構成された2×4住宅であった。当時、基準法18条の認定許可の手続きをとるか否かのギリギリの闘議は行政と行った。

明月谷アトリエ計画は、ビアノハウスで初めて採用された2次曲面の部位を合成して、3次曲面の合板パネルを構造肢と連続させながら一体空間を作る。いわゆる木造壁式の特殊構造の建築である。1978年に作ったビアノハウスと、その後の「ドームハウス」(1989年)、若しくは「片瀬山の家」(1993年)のドーム空間の構造原理の発展系として考案したものである。

何故圓いのかと、人からよく尋ねられる。無意識のうちに圓くなってしまうと答えていたのだが、これでは論理的でないばかりか、自分で納得いかない。

明月谷の、ムンムンした目に見えない陽炎の渦中で、“何故、圓いの……?”を考えてみると、未知を予感させながら、生命を宿している形が実に自然に思えてくるから不思議である。いつ孵化しても不思議ではない。過去において通った意識と無意識との、交差の道の里が、新たな未知を孕みながら釣り合っている。更に向こうにある別の無意識を予感出来るならば、“何故……?”と考える意義は多いにありそうだ。

結局不動産売買上の不手際で、購入予定のこの土地は、直前になって第三者の手にあっさりと渡ってしまった。

しらとり・けんじ/建築家